

ヘヴンズタァン

【序文】

「ヘヴンズタァン」というアイテムが売れに売れている。直訳すると「天国の舌」。片手で持てる長さ30cmほどの棒状のこのアイテムは、表面にザラザラとした独特の小さな突起がたくさんついている。その形状と質感からオナニーの道具として重宝されており、人間種は女しかいないこの世界においてなくてはならないアイテムである。

性欲が抑えられなくなり発情した女はこのアイテムを性器に挿入し、抜き差しすることによって快感を得ることができる。そのスピードを激しくしたり、あえてゆっくり動かしたり、挿入する角度を変えたりして彼女たちは絶頂に達する。

性液を垂れ流しながら、ときには失禁し、ときによだれや鼻

水を垂らしながらも淫らに自慰行為を繰り返す。

そんな無くてはならないアイテムだが、これを手に入れるには注意が必要である。買うのであれば問題ない。というのもこのアイテムの材料はある野生動物の舌であり、その生息地には獰猛で肉食の捕食生物が待ち構えているからである。



第1話【狩る者・狩られる者】

ここはまるで中世のような、それでいて原始のような世界。弱肉強食の生態系があり、強い生き物が弱い生き物を捕らえ喰らい生きている。この世界において人間は、それほど強い立場にはない。肉体的にはむしろ弱く、獲物として捕食される側にある。ゆえに彼女たちは武器を手にとり、徒党を組むが、それでも大自然に生きるモンスターたちを制御下に置くにはほど遠い。彼女たちは生活のために狩りをし、生き残るた

めに討伐する。

ちなみにこの世界には若い女しかいないが、そこに疑問を持ってはいけない。とにかくそういう世界なのだ。

ここは荒野の町・ザハラ。この町の酒場ではスレイヤー、つまりモンスター狩りを生業とする女たちがよく入り浸っている。片手剣の使い手・レイラもまたその一人。スラリとした体型でありながら、バストとヒップはやや大き目。年齢20歳。

最近ギルドからレアフロッグの狩猟依頼が増えている。その理由は誰もが納得できる。ヘブンズタァンの材料はそのレアフロッグというカエルのような生き物の舌だからである。少女は10代ともなれば、いや早ければもっと前から自慰行為は始まる。どんな清楚な少女でも、どんな童顔で幼そうに見える女でも、溢れ出す性欲には抗えない。なので需要はすこぶるあるが、残念ながら供給が追いついていないのである。

ちなみにレアフロッグの体長は通常30cmほど。ミニマム

ニンゲンモドキという人間の若い女をそのまま縮小したような生き物を主食としており、獲物を見つけると静かに背後から忍び寄り、伸縮自在の舌を勢いよく発射しご馳走の尻穴へとぶち込む。肛門の奥の直腸の内壁に、舌の表面にあるザラザラとした無数の突起が引っかかりそのまま口へと運び捕食してしまう。その狩りの道具がヘブンズタアンというわけである。まあ実際にはヘブンズタアンはアイテムの名前であり、仕留めたレアフロッグの舌を乾燥させて作った物であるが。

とにかく、このヘブンズタアンの存在を知ってしまえば誰もが欲しがる。この荒野の町ザハラでも使う者が増えてきた。かくいうレイラもまたその一人。自分で狩った獲物の舌を乾燥させ、自分で使っている。

酒場には他の客が何人もいるが、レイラは人目もはばからずヘブンズタアンを性器に挿しこみ、ゆっくりと股間で味わうようにゆっくりピストン運動を続けながら酒を飲んでいる。周りの視線がレイラに集まっているが、彼女はお構いなく自慰行為を続ける。

酔っているのか？それも確かにあるが、わりといつものことであつたりもする。店の常連客はいつものことと気にしない様子だが、見慣れない者たちは気になって仕方がない。興奮し性液を垂れ流しながらレイラは声を上げ始めた。カウンターの向こうでは背の高いグラマーな美女がレイラをにらみつける。この店のマスターである。

「ちょっと！他の客に迷惑なんだけど！」

と怒鳴られるも、レイラは構わず快感の絶頂を迎えさらに大きな声を上げ果てる。そして股間にヘヴンズタァンを挿し込んだまま、ぐったりと脱力する。しばらく余韻に浸ってからゆっくりとそれを抜き、マスターにようやく返事をする。

「私が客を呼んでやってんだからさあ、これくらい目えつむってくれよ。」

彼女の言っていることは間違っていないかった。この世界の人間が生きていくために必要な生活必需品の中には、材料がモンスターの身体からとれるものも含まれる。また町

がモンスターに襲われそうなとき、あるいは人通りが多い場所にモンスターが出没した際の討伐など、スレイヤーはいなくてはならない存在であった。

レイラはその中でもわりとベテランであり、狩りの腕は確かだった。生活必需品の材料となるモンスターの狩りですら、スレイヤーでないと難しい物もある。素人が下手に手を出せば簡単に喰われてしまう。牙も爪もなく力も弱い人間の女など、彼らにとってはむしろご馳走なのである。

辺境であれば、レイラのようなスレイヤーたちが多ければその町は栄え、いなくなればその町は危険にさらされる。とはいえスレイヤーたちも狩った獲物を換金し他のものを買う環境がなければ生計は立てられないので、持ちつ持たれつではあるが。

レイラの羞恥心のかけらもない自慰行為を興味深そうに見ていた女たちの一人が席から立つ。身長はレイラより高くバストもヒップも豪快で、それでいてウェストは引き締まった身体がビキニのような布から肌を見せている。そして身体とは見合わない童顔な美少女。まだ10代であろう。2

メートル近い大きさの両手剣を装備している。彼女もおそらくはスレイヤーなのだろう。彼女はレイラに歩みより話しかける。

「なあ、それ、売ってくれない？」

レイラは答える。

「お嬢ちゃん、在庫はないんだ。狩った獲物は基本的に売っちゃうから。」

少女は答える。

「じゃあさ、どこで狩ったか教えてよ。私も狩りやってるから」

レイラは彼女の身体を少しのあいだ無言で見る。そして口を開く。

「まだ初心者だよね。喰われるのがオチだから、もちょっと初心者向けの獲物狙った方がいいよ。」

少女は返す。

「いいから教えてよ。」

レイラ「欲しいの？」

少女「うん。高くてさ。」

レイラ「あ〜〜〜自分用の？ダメダメ、そうやってレアフロ狩ろうとして喰われてった奴ら腐るほど見てきたから」

少女「ああ。大丈夫、私でも狩れるから。大きくてもせいぜい50cmってところでしょ？」

レイラ「レアフロはね。もっとヤバい奴らもたくさんいるから。」

少女「いいから教えてよ。」

レイラ「・・・ま、いいけど。」

レイラは少女にレアフロッグの生息地を教える。この荒野

から少し離れた密林に棲息しているらしい。少女は軽くお礼を言って酒場を後にする。すぐに他の客たちも何人か勘定を済ませ店を出ていった。

マスター「あ〜あ。」

レイラ「ん？」

マスター「さっき出てった子たち、今の話聞いてたんじゃない？」

レイラ「みてーだな。」

マスター「どう？」

レイラ「狩る側だと思ってんだな〜。ま、喰われるんじゃない？」

マスター「…………。」

レイラ「止めたじゃん、一応。それでも狩るっつーんなら、好きにすりゃいいんじゃないね。私もそろそろ新調すっかな。」

マスター「え、また？」

レイラは手に持つヘブンスターンを見ながら言う。

「摩耗しちまってさあ、ザラザラ感がなくなってきたんだよね〜。」

マスター「使い過ぎだろ。1日何回やってんだ。」



第2話【獲物を味わう】

スレイヤーの少女たちは荒野を抜け密林にやって来た。先ほどレイラの話聞いて店を後にした少女たちはパーティを組んでいたらしい。レイラから直接話を聞いていた少女がリーダー格のようで、名前はカヤという。両手剣使い。パ

ーティは全員で3人。片手剣使いと弓使い。三人とも童顔なので10代のように見えるが、実年齢は分からない。酒場で同じようにレイラの話聞いて店を後にした女たちがあと何人かいたが、おそらく彼女たちもこの密林へ来ているのであろう。

ここ最近スレイヤーたちの装備は動きやすさ重視の軽装備がスタンダードとなっている。カヤだけでなくパーティの少女たち全員が露出度の高い服装で、暑さから彼女たちの肌はじんわりと汗ばんでいた。

彼女らはしばらく密林の中を密集体形で進んでいたが、いっこうにお目当てのレアフログは見つからない。そこで間隔をとって進むこととなった。お互い声が届く程度の距離を保ちながら前進していく。

そしてようやくカヤは目当てのレアフログを見つけた。しかし声は出せない。思いのほかすばしこい生き物らしいので、逃げられるのは嫌だ。そっと忍び寄る。獲物は逃げない。それどころかカヤの方へ静かに近づいてくる。じつはレ

アフロググにとって人間の女もまた獲物なのだ。とはいえ体格差から捕食することはできない。どうゆうことかと言うと、雌肉の性液もエサとしているのである。

生きているレアフロググを初めて見たカヤもその習性は知っており、「本当にそうなんだ」という確信を得、パンツを脱ぎ生尻を彼に向けてみる。レアフロググはエサの匂いをさらに強く感じとり、カヤの尻に近づいていき、至近距離まで来たところで口を開け、勢いよく舌を発射しカヤの性器にぶち込んだ。

「はぁっ、、、」

快感に声を上げるカヤ。レアフロググは舌を戻す。本来なら獲物を尻から口へと引っ張り込む動きだが、獲物の方が重く大きいので逆に彼がカヤの股間へと密着する。レアフロググはカヤの股間に喰らいつく。またも快感の声を上げるカヤ。喰らいついたもののレアフロググに人間の女を捕食するだけの力はない。が、これで良い。

レアフロググはカヤの股間に喰らいついた状態で、性器にぶち込んだ舌を何度も何度も伸縮させピストン運動を始め

る。カヤは四つん這いになり、激しいオーガズムを堪能する。やがてカヤの性器からは性液が垂れ流れ、レアフロッグはそれを飲み込みだした。そう、じつは本当に雌肉に快感を与える目的もあって彼らの舌はこの形状となっているのである。主食であるミニマムニンゲンモドキが数を減らしたときの対応策として、レアフロッグは人間の女もエサに出来るような身体に進化していた。彼は獲物のオーガズムが収まらないよう、執拗に何度も何度もピストン運動を繰り返しエサである性液を飲みつづけていく。



第3話【ご馳走】

カヤがすでに一人で(ある意味)目的を果たしているとは知らず、パーティの少女たちはそれぞれ密林のさらに奥へと進んでいた。彼女たちはスレイヤーでありモンスターを狩ることが仕事ではあるが、今回の目的は自分が使うための

ヘブンズタアンをゲットすることであった。もちろん余るほど獲れば売ることになるであろうが、それよりもまず自分が欲しいのである。それもあって皆貪欲にレアフロッグを探しつつける。静かに音を立てずに進んだこともあって、彼女たちはすでに皆孤立してしまっていることに気づいていなかった。スレイヤーとしては初歩的なミスで、やはりレイラの見立て通り初心者だったようである。

少女 A は尿意をもよおし、その場でしゃがんでパンツを下ろす。雌肉の匂いがただよう。彼女は汗ばんでおり、体臭がより強く密林へと広がっていく。これは捕食者を呼び寄せてしまう行為であるが、またしてもスレイヤーとしては初心者がやらかしてしまうミスを重ねてしまった。その美味そうな匂いに惹かれて巨大なモンスターが静かに彼女に忍び寄ってきたことに気づいてはいなかった。

気持ちよく放尿を終え、心地良い余韻に浸っている少女の背後に巨大なカエルのような生き物が、無防備に生尻をさらしたままの獲物を狙っていた。ヴォアフロッグである。体長3メートルを越える捕食者は静かに口を開け、勢いよく舌を少女 A の肛門へとぶち込んだ。その勢いで前のめりに倒れた少女は次の瞬間、今度は後ろ方向へと引っ張り込ま

れる。そしてヴォアフロッグの大きな口に少女の生尻は咥え込まれた。

何が起こったのか分からない少女はジタバタするが、ヴォアフロッグの強靱な顎から逃れることは出来ない。美味そうな獲物を尻から呑み込んでいくヴォアフロッグ。鋭い無数の牙が少女の尻や太ももに突き刺さっていく。顎に伝わる雌肉の弾力が心地良い。自分がエサとして喰われていることにようやく気づいた少女だが、もう何も出来ない。ヴォアフロッグは思いきり顎に力を込める。

「バキッ！」

獲物の腰骨が砕けた音とともに、少女はだらんと脱力。もはや食肉となった少女の身体を、ヴォアフロッグは美味そうに呑み込んでいった。